

気候変動に関する政府間パネル(IPCC)

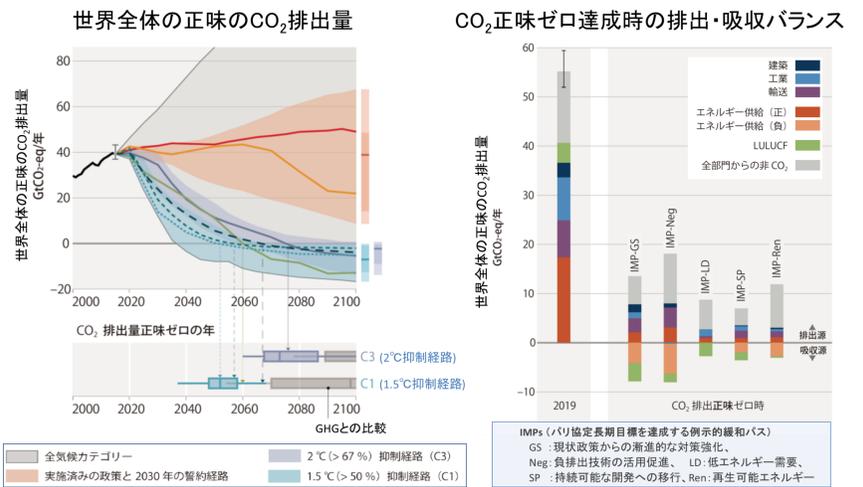
— 第7次評価サイクル始動に向けて —

IPCC (Intergovernmental Panel on Climate Change; 気候変動に関する政府間パネル)

- ◆ 1988年に国連環境計画(UNEP)と世界気象機関(WMO)により設立され、195ヶ国が加入。
- ◆ 地球温暖化に関する科学的、技術的、社会経済的な知見の収集とその評価を、自然科学的根拠(第1作業部会; WGI)、影響と適応(第2作業部会; WGII)、緩和(第3作業部会; WGIII)の観点から実施して、報告書を作成しています。
- ◆ これまでに第1次から第6次の評価報告書、多くの特別報告書等が作成され、気候変動に関する国際連合枠組条約(UNFCCC)における温暖化抑制の目標数値に係る取り組み指針の科学的根拠となる等、気候変動の国際交渉の方向性に影響を与えてきました。
- ◆ 2023年3月にAR6が公表された後、第7次評価サイクルにおける新たなIPCCビューロー(議長団)とインベントリータスクフォースビューロー(TFB)がIPCC第59回総会(2023年7月 ナイロビ(ケニア共和国))にて選出されました。今後AR7サイクルの評価報告書や特別報告書のスコープが決まり、執筆者が選ばれ執筆が始まる一連のプロセスがスタートする予定です。

第1作業部会(WG1) 自然科学的根拠	• 気候システム及び気候変動についての 自然科学的側面から評価 を行う
第2作業部会(WG2) 影響・適応・脆弱性	• 生態系、社会経済分野における気候変動への 脆弱性や適応性について評価 を行う
第3作業部会(WG3) 緩和策	• 温室効果ガスの排出削減など気候変動に対する 緩和策について評価 を行う
インベントリー・タスクフォース(TFI)	• 温室効果ガスの国別排出量・吸収量の インベントリー作成手法(方法論)の策定及び改善

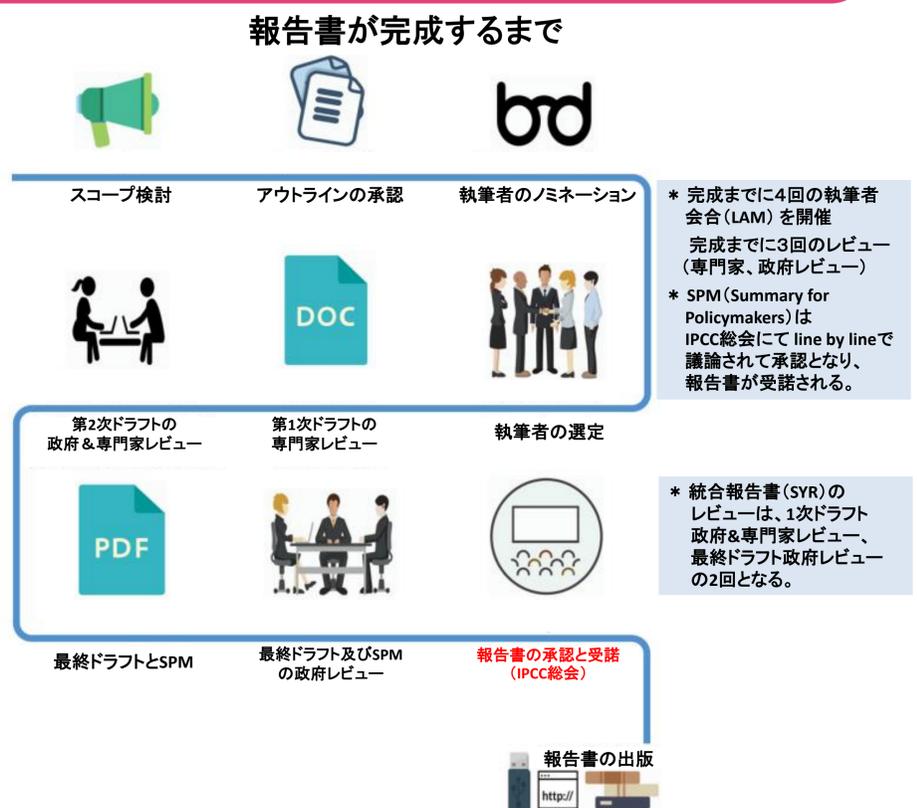
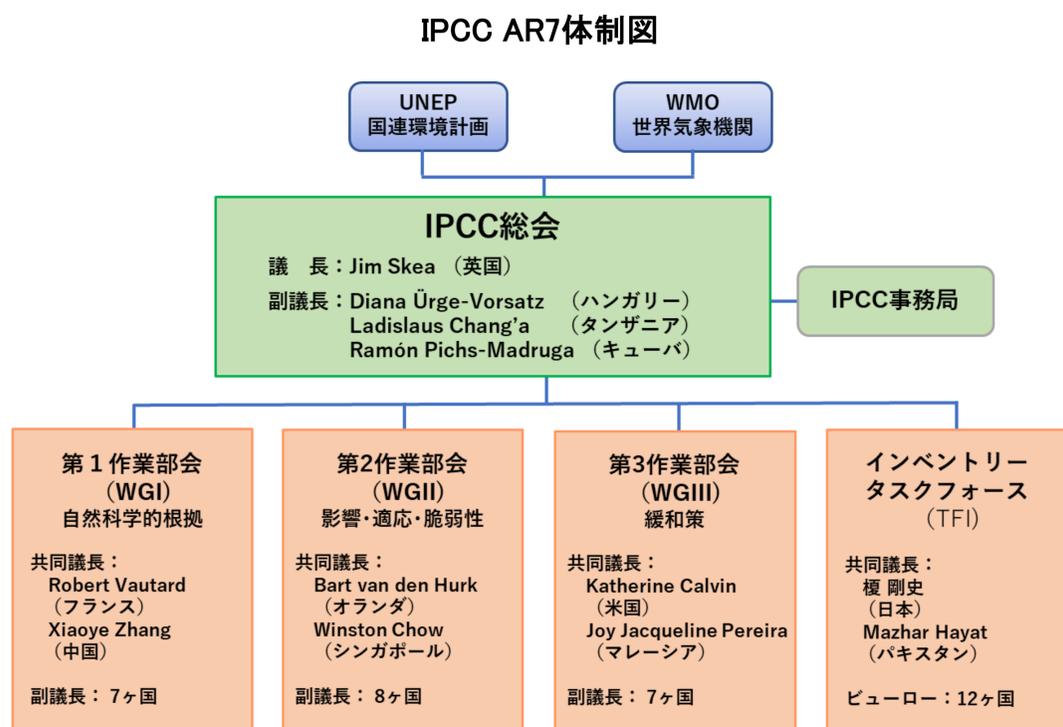
第6次評価報告書 第3作業部会報告書(AR6 WGIII)の概要



- ✓ 1.5°C、2°Cに抑える緩和経路モデルは、深く急速で持続的な排出削減が必要。
- ✓ CO₂正味ゼロ排出の達成のためには、削減が困難な残余排出量を相殺するCDRの導入が不可欠。(CDR:CO₂除去技術)

- ◆ RITEは経済産業省から委託を受けて、IPCC国内連絡会WGIII事務局を担当し、IPCC総会への参加等を通じた情報収集と分析、緩和策に関するアウトリーチ活動等を実施しています。

第7次評価サイクル 体制図と報告書作成プロセスの概要



CCSの国際標準化

— CCSの普及をめざして —

二酸化炭素回収・貯留(CCS)は、地球温暖化対策の重要な選択肢の一つとして期待されており、すでに諸外国では、多くの実証試験、商業規模でのCCS事業も実施されています。近年は、カーボンニュートラル達成のためCCSが必要不可欠との認識が広がり、CCSに関わる様々な活動が行われています。特に、排出源からCO2圧入域までの輸送手段として有力なCO2船舶輸送は注目度が高く、ISO/TC265でも新たに専門のWGが設立されています。一方、CCSの普及に関する課題としては、高コスト、インセンティブの欠如、および住民合意に係わる不確実性などが挙げられます。

CCSの国際標準化は、それを利用することで、CCS事業が安全、環境面で国際的に合意された知見に沿っていることが保証されるため、『CCSの安全で適切な普及』に貢献するものと考えています。RITEではISO/TC265の国内審議団体として、CCSの国内標準策定に関し積極的な活動をしています。

ISO/TC265の概要

➤ スコープ

CCS分野における設計、建設、運用、環境計画とマネジメント、リスクマネジメント、定量化、モニタリングと検証及び関連活動の標準化

➤ 経緯

2011年10月にTC265設立。これまでTC265総会を計17回各国で開催。

➤ 参加国、リエゾン機関(2023年8月時点)

Pメンバー(25カ国)

日本、豪州、オーストリア、ブラジル、カナダ、中国、デンマーク、フランス、ドイツ、アイスランド、インド、アイルランド、韓国、マレーシア、オランダ、ノルウェー、ポルトガル、ロシア連邦、サウジアラビア、シンガポール、南アフリカ、スウェーデン、アラブ首長国連邦、英国、米国

Oメンバー(17カ国)

アルゼンチン、ベルギー、チェコ、エジプト、フィンランド、ハンガリー、イラン、イタリア、ルクセンブルク、メキシコ、ニュージーランド、ポーランド、カタール、セルビア、スペイン、スリランカ、タイ

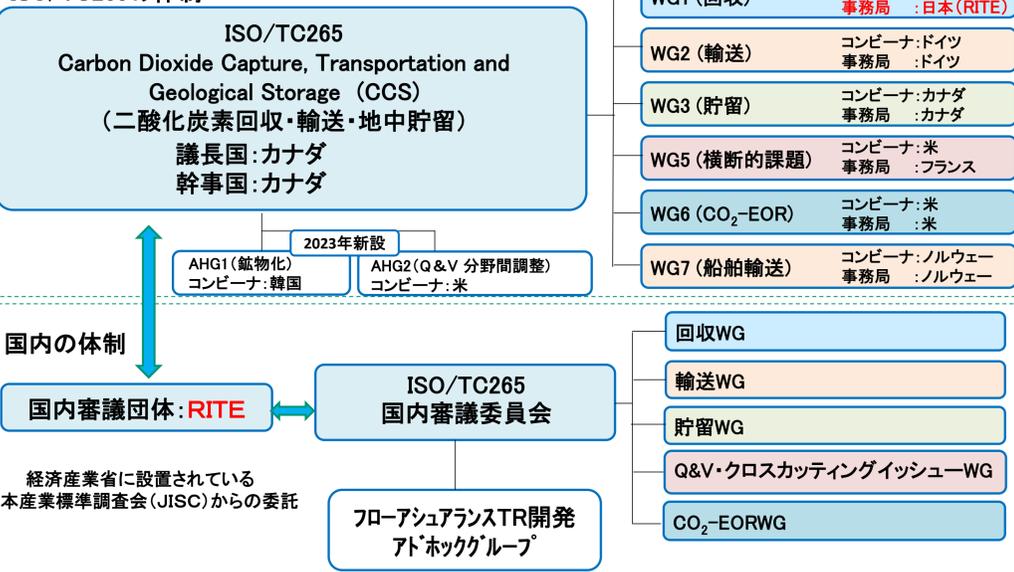
リエゾン機関(9機関)

CO2GeoNet、CSLF、EIGA、GCCSI、IEA、IEAGHG、IOGP、WRI、ZEP

ISO/TC265の体制及び各WG進捗状況と今後の予定

2023年8月時点

ISO/TC265の体制



ISO/TC265体制 アドホックグループ(AHG)新設

- 鉱物化の課題を扱うために、新たにAHG1(鉱物化)を設置
- Q&V、WG間マネジメントのために、新たにAHG2(Q&V 分野間調整)を設置

標準の出版状況

- これまでISO/TC265から発行された出版物は計13
- 来年以降も、ISO/TC265からIS・TR等が発行される予定

2022年、2023年に発行された出版物の概要(2つ)

- WG5(クロス Cutting イシュー) — TR27925 **NEW!**
CCS全般に横断的に関わるフローアシュアランスについての技術報告書
- WG3(貯留) — TR27923 **★カナダ・日本主導で開発★**
貯留に関する技術報告書
・圧入オペレーションと圧入設備
・モニタリング

分野 (WG)	発行された規格文書(赤字:直近1年間の発行)		発行	開発中の規格文書
	規格文書	発行		
CO2回収(WG1)	TR27912 回収技術全般	2016.5	日本主導で開発	ISO27927 吸収液性能要素と測定方法 ISO27928 産業分野回収プラント性能評価方法 ISO27919-1 発電分野燃焼後回収性能評価(定期見直し)
	ISO27919-1 発電分野燃焼後回収性能評価	2018.9		
	ISO27919-2 発電分野燃焼後回収性能維持	2021.10		
	TR27922 セメント産業回収技術	2021.2		
CO2輸送(WG2)	ISO27913 パイプライン輸送	2016.11		ISO27913 パイプライン輸送(改訂・新规定)
CO2貯留(WG3)	ISO27914 貯留	2017.10	カナダと日本主導で開発	ISO27914 貯留(定期見直し・Q&V導入)
	TR27923 圧入オペレーションと圧入設備、モニタリング	2022.1		
定量化と検証(旧WG4)	TR27915 定量化と検証	2017.8		-
横断的課題(WG5)	ISO27917 ポキャブラリ	2017.12		ISO27917 ポキャブラリ(定期見直し)
	TR27918 リスク管理	2018.4		
	TR27921 CO ₂ 流の組成	2020.5		
	TR27925 フローアシュアランス	2023.7		
CO2-EOR(WG6)	ISO27916 CO ₂ -EOR	2019.1		TR27926 EORから貯留への移行
CO2船舶輸送(WG7)	-	-		TR27929 CO2船舶輸送

今後の取り組み

- 既存のプロジェクトに加えて、新規プロジェクトも推進
 - ✓ ISO27917(ポキャブラリ) 改訂
 - ✓ ISO27919-1(発電分野燃焼後回収性能評価) 定期見直し
- 出版されたISO、TR等の利用方法の検討
 - ✓ JIS化、適合性評価、法律制定時の活用

(本資料は経済産業省からの委託事業の成果をもとに作成しています。)

このポスターに関する問い合わせ先:RITE青木 aoki@rite.or.jp